



# 文の京文芸賞

第四回文の京文芸賞には、おかげさまを持ちまして全国から435点のご応募をいただきました。去る9月8日、選考委員である加賀乙彦・奥本大三郎・沼野充義の三氏により、慎重かつ厳正に行われた最終選考会において、最優秀賞受賞作が決定いたしました。

## 最優秀賞(敬称略)

「甕の鈴虫」 竹本 喜美子

## 最優秀賞候補作(敬称略・順不同)

「文京区史跡めぐり」 中山 怜子  
「ジェットコースターガール」 李 周子  
「嫁の心得」 中得 一美  
「海を駆ける」 小浜 幹

## 選考経過

平成20年 5月～平成21年4月30日 募集期間  
平成21年 6月 5日 第1次選考終了(24点選出)  
7月14日 第2次選考終了(5点選出)  
9月 8日 最終選考  
平成22年 2月 2日 授賞式

## 著者略歴



### 竹本 喜美子

長野県茅野市生まれ。  
お茶の水女子大学卒業。  
国会議員秘書を経て、主婦。  
『花色運河』で第11回長野文学賞、  
『最終バス』で第1回木山捷平短編小説賞受賞。  
著書『隣のイングリッシュガーデン』

## 最優秀賞 竹本 喜美子

### 「甕の鈴虫」

#### あらすじ

昭和の30年代。小学四年生の寿々子の家は信州の寒天屋である。冬には天屋衆と呼ばれる出稼ぎの男たちが泊り込む。南方から引き揚げてきた母は厳寒に働く寒天屋に嫁に来て右往左往している。父の妹幸恵おばちゃんが、胸の病気で出戻ってきた。おばちゃんは女学生だったとき国語の先生に憧れて、自分もアララギというところで歌を詠んでいた。モミの木ならぬ庭のアララギの木に寿々子とクリスマスの飾りつけをしたおばちゃんは、療養所で知り合った男と駆け落ちをする。障害を持つ房子を渡りの天屋衆が孕ませる。そして転校生の修治くんと寿々子の淡い初恋。戦死した兄の影を背負う父や中風の祖父、説教魔の祖母など、大人たちの、寿々子を見つめる目が温かい。

※タイトルは「似たものにあらず」より改題、筆名は牛山喜美子から変更しております。

## 受賞の言葉

真冬に中央本線茅野駅に降り立つと、「寒天の里」というのぼり旗が、切るような風に揺れていることでしょう。大方の人が「おお、さむ」と口に出して首をすくめ、駅舎の中へ急ぎます。その寒風が、干した生天を寒天へ変えてゆくのです。厚く綿を入れた半纏を着て、手ぬぐいで頬かぶりをした天屋衆の、霜柱を踏むザクツという音が、今でも耳に蘇る気がします。「天屋日和」です。

そこに育った幼い日の私の記憶に靴を履かせたら「寿々子」という女の子が走り出しました。おかつ頭の寿々子は父母、祖父母、妹、胸の病気を持ったおばちゃんなどに囲まれて、赤いほっぺを膨らませ、「いい天ができるら」などと生意気な口をききました。

故郷を出て30数年経ちましたが、今、私は老いた両親の介護のためにそこへ戻っています。今回、寒天屋の寿々子ちゃんの話にスポットライトを当てていただいたのは、そんな私へのエールのような気がしてなりません。

心からありがとうございます。

## 選 評



加賀 乙彦

竹本喜美子氏の「甕の鈴虫」にもっとも感心した。信州の寒天屋の生活という、あまり知られていない、おそらく昭和三十年代のころの生活が生きて描かれている。

寒天はテングサのねばねばした部分を凍結乾燥して造りあげるのだ。そのために信州の寒い冬に、天屋衆と呼ばれる海辺の男たちが手伝いに信州の山の中へやってくる。その男くさい家のなかで主人一家の生活が独特の風習と習慣でいとなまれている。一時代前の古風な雰囲気、読者の興味を引きつけていく。丁寧に書き込まれた品のよい文章がこの一風変わった世界を表現していく手並みがいい。

登場する人物がなかなか魅力がある。子供の寿々子の視点から描かれているのがこれが成功している。妹の千鶴子、両親が子供の澄んだ目で見られている。父の妹の幸恵おばさんは、湖のほとりの温泉宿の息子に嫁に行くが結核になって実家に返される。色白のこのおばさんが天屋衆に見られないように奥の部屋に隠れている。しかし、幸恵おばさんは読書好きで、姪の寿々子に文学の面白さを教えてくれるのだ。

障害のある房子という女の子が、天屋衆にてごめにされて孕まされるという話も、それなりに生きている。

もう一つ、転校生の修治という少年への淡い恋もさりりと描かれている。



奥本 大三郎

苟も他人(ひと)が一生涯懸命書いて応募したものを評価するとなると、読み違いがあっては申し訳ない。そう思うから、公平を期するために私は、少し分析的に、いくつかの要素に分けて点数をつけてみることにしている。

その要素とは、「文章」「面白さ」「完成度」であるが、それに「品位」とか「独創性」というのを加えることもある。これを、A、B、Cの三段階に分けるのである。

もちろん「文章」などといっても、それがまた問題で、どのようながいい文章かと言い出すときりがない。だからそこは、私の好みということになる。強いて言えば、て、に、を、はに間違いがないこと、破綻がないことが最低の条件、ということであろうか。

文章がそこそこ良くても退屈で、発想が平凡だったりすると読む方はつらい。だから「面白さ」は大切なのだが、これもまたいろいろで、面白さは人によって違う。

「完成度」というのは、出版して世に問うとなると重要な要素であるが、これもまた、少しばかり欠陥があっても、この部分を書き直せばぐっと良くなる、というようなことがあって、締切り間際に慌てて書いたおぼしき作品などは、惜しいなあ、と思ってしまうことがある。

もっと難しいのは「品位」で、品位の点で最悪であるが、文学作品としては上等というのが存在するのである。

そして、「独創性」、これがまた難しい。これだけいろいろな人が



沼野 充義

李周子さんの「ジェットコースターガール」は、タイトルが端的に示す通り、勢いがよい。読んでいて、あれよあれよという展開に目が回るほどだった。それが作者の狙いであれば、狙い通りになっているとは言えるかもしれない。しかし、飲み過ぎて急性アルコール中毒になるナースという破天荒な設定に始まる物語は、よく言えば奔放で才能を感じさせるものの、悪く言えばあまりに荒っぽい。かりにトタバタ風味の恋愛コメディを狙うのであれば、いったん立ち止まって文章を練り直すことを考えてみたらどうだろうか。

中得一美さんの「嫁の心得」は、一転して、江戸初期を舞台にした時代小説。しかし、これも別な意味で一種、破天荒な作品である。農家出身の、色黒で、身の丈六尺を超える不器量な大女が、夫の仇討のため旅に出て冒険を重ねる、という設定は愉快だし、意外な展開もしかけている。映画化したら面白い作品ができるのではないだろうかと思った。しかし小説作品としてみると、面白くて説得力がある部分と雑な部分が混在していて、中途半端な感じになってしまっているのが残念だった。

中山怜子さんの「文京区史跡めぐり」は、文京区在住の主婦がみずから訪ね歩いた文京区の史跡をめぐる、連作エッセイ集である。著者はもう孫もいるというお年なのに、珍しい史跡を見ればその来歴を熱心に調べたがる「知りたがり虫」であり、また思い立ったらすぐに筑波山にも行ってしまいう行動力の持ち主でもある。日常的な視線と素直な思いがそのまま文章になっているため、文学にはいま一步といったところだが、このような文章を熱心に書いている区民は地域の宝ではないかと感激した。いつまでもお元気で散策を

男くさい天屋衆の大勢いる家で、彼らから隠れて人々の生活が平行して進んでいくのがこの作品の世界の成立の仕方であり、方言まじりの会話が生きているのがよい。

この「甕の鈴虫」と対照的なのが李周子氏の『ジェットコースターガール』である。現代的な若者言葉を多用して、文章にスピードがあって漫画的な世界である。話は現代の風俗を捕らえているのだが、小説の世界という文章による表現はまだまだ足りないところが多い。エロチックな生活が勇敢に描かれている。主人公の家の中はまったく整頓されておらず、母親とセックスをするような乱れた世界が、それなりに興味を引く。恋愛やモラルなどを無視しているところ、つぎつぎに男女が入り乱れて活躍するところは小説としての興味があるものの、話が拡散していて作品としてはまとまりを欠く。この人、文章のさらなる習練が必要である。

もうひとつ似たような作風の中得一美氏の『嫁の心得』という時代小説があった。醜女の女が金目当ての貧乏武士に嫁ぎ、夫が殺されたため仇討ちの旅に出る話である。あり得ないような出来事の連続で、小説としては不出来だが文章の才能は認められる。

小説と文体との関係について、無神経な作品は、もう一度丁寧に書き直すよくなるかもしれない。漫画の文体をそのまま小説で用いても、かえって力不足になることを、よく考えてほしい。

いろいろな作品を書いている時代に、あっと驚くような独創的な作というのは望むほうが酷であろう。

そうした点を考えて読みながら、一位は「甕の鈴虫」だろうと思った。文章、品位がAで、完成度が、ちょっと繰り返しがあるのでAというところ。面白さはBを付けた。「ジェットコースターガール」は品位の点でCなのだが、これは作者がわざとそうしているようであるから、マイナスにはなるまい。文章はもう少し時間をかけて書き直せば良くなると思われるが現時点ではBであり、面白さはAだが、少しサービス過剰で無理をしている感じがする。完成度もBもしくはCである。

「嫁の心得」はストーリーがそれこそハチャメチャだが、面白く読め、劇画の原作のような趣きがある。品位、完成度ともにCであるが、全作品の中で唯一、「独創性アリ」と感じさせられた作品である。時代小説ではあるが、いわゆる時代考証などというものは、全く無視している度胸には恐れ入る。

「海を駆ける」は青春小説として、何だかなつかしい感じのする作で、伝馬船競争の場面などはリアリティーがあり、読ませる力がある。

『文京区史跡めぐり』は、私のように同じ文京区の住人として、土地カンのある人間にも、実感をもって読める文章で、参考になった。

続け、書き続けてください。

小浜幹さんの「海を駆ける」は、瀬戸内海を舞台にした青春ドラマ風の小説。高校生たちの悩みと恋、挫折と希望が、わかりやすい物語の展開の中で前向きに描かれる。祭りの興奮や伝馬船競争の手に汗握るスリルなど、物語の山場の作り方もうまい。ただし、面白く読ませて物足りなさが残るのは、物語がいささか類型的で、すべてどこかで見たことがあるといった感じを受けてしまい、心理の深みや襲に踏み込んでいないもどかしさがあるからだろうか。

竹本喜美子さんの「甕の鈴虫」は、昭和30年代、信州の寒天屋で育っていく多感な少女の物語である。落ち着いたしっとりとした文体で、寒天屋の人間模様や信州の自然が少女の目を通して描写されていく。文学としてはいまだ古きタイプのようにも見えるが、それがむしろ好ましく感じられるのは、著者の観察眼の繊細さと、奇をてらわす対象にまっすぐ向き合おうとする著者の姿勢の良さのおかげだろう。後半は文学を通して成長していく少女の読書遍歴の物語にもなり、文学の力を信じる著者の思いが、この作品そのものをも支えているという印象を受けた。新しいものを切り拓くインパクトには欠けるが、しみじみとした良さがある。一見平凡なようでもあるこの良さを、文学として成り立たせるのは相当難しい。竹本さんはその難しいことに挑戦し、見事に成功した。この作品を受賞作として推すことに、ためらいはなかった。